

## 冒険学校は「学校」か？（後編）

「冒険の学校」から「学校の冒険」へ

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

前編では、冒険学校が非学校的な側面を多分に持っていること、そしてその一方で、「学校」という言葉が、現代の「教育/学習の場」として当たり前前に浸透していることから、冒険学校もまた「学校的」な構造を持っていることを確認した。

### 3. 「冒険の学校」から「学校の冒険」へ

活動内容や体制に非学校的な要素を多分にはらみながらも、冒険学校が「学校」という名を冠していることは、どのような意味を持っているのか。前回確認したように、一つはもちろん、「冒険の学校」という意味があるだろう。それは冒険学校が、いかに非学校的に——あえて言えば「冒険的」に——見えたとしても、**冒険学校における私たちの行動には、知らず知らずのうちに、学校的な振る舞いが浸透している、**ということだ。

他方、より重要であると私が考えているもう一つの意味は、さしあたり「学校の冒険」とでも言うべきものである。

これは、ただ単に「学校以外の場」としてオルタナティブな学びの場をつくる、ということではない。「学校の冒険」という言葉で私が意味しているのは、冒険学校が学校という名を冠していることそれ自体が、わたしたちの中に浸透している「学校」という言葉の意味そのものを揺るがしていく可能性を秘めているということだ。言い換えれば、**冒険学校の活動において、わたしたちの中にある「学校」の観念そのものが「冒険」にさらされるような事態である。**

少し個人的な話をしよう。

私自身は、大学一年生のころ初めて冒険学校に参加した。いまでこそ教育哲学の研究を仕事にしたいと考えているが、当時は純粋に教員を目指していた。そんな私にとって、冒険学校が持つ非学校性——大人たちの自由奔放さ、子どもに対する制約の少なさ——は、「学校」や「教育」のあり方そのものに対する見方を変えるものであった。

この印象は、その年に同じく子どもの野外活動を中心とする別のNPO（2019年に50周年を迎えた、筑波大ルーツの老舗である）でスタッフを経験したことでより強まった。そちらのキャンプも非常に勉強になったし良い体験ではあったのだが、冒険学校と比べるとあれば、よほど「学校的」であった。子どもたちは班に分けられ、就寝や起床は一律（ラップで起こされる）、キャンプ場の掃除なども含め、プログラムは固定。スタッフは教員が忙しすぎて寝る暇もない、というところまで、まさに「学校的」であった。

目指すところが本会とは異なるので、どちらが良いということではないのだが、いわばそのキャンプは私が知る「学校的」な教育の延長線上に位置していたのである。そしてそれと比べたとき、INCHの冒険学校は、大袈裟に言えば「学校教育」というものの捉え方自体を揺さぶる、魅力的なものに感じられたのだ。

どれだけ自覚的かはわからないが、スタッフたちのなかにこうした印象を持っている人はいるのではないだろうか。例えば、元参加者の立場から現在スタッフとして冒険学校に参画している人の多くは、一般的な意味での「学校教育」とは異なる教育への期待を、「冒険学校」のなかに見出してきているように思われる。東京学芸大学関係のスタッフたちと異なり、彼らの多くがその後のキャリアとして「学校」に携わるわけではないことから、冒険学校における彼らの「非学校性」は顕著である。

他方で、普段は学校教育に従事している現役教員スタッフたちもまた、INCHの活動においては少し変わった角度から教育/学習を見つめなおし、再び日常の学校教育にそれを反映させているのではないだろうか。そ

これは、単に冒険学校の経験が現場でも役立った、という表面的な効果にとどまるものではなく、どこかもう少し深い部分での、ただし気が付きにくい変化の積み重ねなのではないかと思われる。

(特にベテランスタッフたちは、学校にいながらにしていくだけでも「冒険」が可能であることを体現しているように感じられる)

つまり、「学校の冒険」とは、非学校的な学校である冒険学校との関わりを通して、参加者、スタッフ、保護者、地域住民のなかにある「学校」(教育/学習)のあり方そのものが捉え直されていく、というポジティブな可能性を指しているのである。

このように見るのであれば、冒険学校が学校の名を冠していることは、それが学校的なものに縛られているというネガティブな意味にとどまるものではない。それはむしろ、より広い射程へとその実践的意義を広げていくきっかけとさえ言えるだろう。

冒険学校は「冒険の学校」であるとともに、それぞれが持つ「学校」のあり方そのものを「冒険」へと開く場所なのである。

## おわりに

最後に一つ付け加えておきたいのは、この「学校の冒険」としての冒険学校が可能であるためには条件があるということだ。

それは、スタッフや運営側の少なくとも一部が、冒険学校が孕む「学校的な要素」と「非学校的な要素」に自覚的であること、すなわち、「冒険の学校」としての冒険学校のあり方——「学校の冒険」ではなく——に自覚的であることである。(あえて「学校の冒険」という違和感を強調する言い回しを選んだ理由の一つは、こうした自覚のための印象付けでもある)。

人々が「自粛」の「要請」を次第に受け入れていったように、一見矛盾するにもかかわらずそれを無意識に受け入れることができるのは、それが本来持っている言葉の意味や意義が、自明化し、透明化していくからである。

自らの行動が「学校的か否か」すらわからなくなるほど、「学校的なもの」は私たちの日常に深く浸透している。それはときに、学校的な仕組みが生み出している問題やその原因が「当たり前すぎて見えない」という事態を引き起こしてしまいかねない。重要なのは、冒険学校の「学校的」要素が良いか悪いか、という個別の問題ではなく、いかに私たちがそれに対して無自覚か、という点である。

私が教育哲学を学んでいる理由の一端もここにある。No.156掲載の予告編で、私は「教育哲学」の仕事を「当たり前を疑う」ことだと述べた。そう、まさにこうした自覚のための方法としてこそ、教育哲学が力を発揮するのである。

(次回からは、「冒険学校」の「冒険」の側面について、絵本を例とする「生成の学び」という観点から考えてみる予定)



(図 1) 個人テントの導入をはじめ、コロナ禍以降はいくらも「学校的」とも言える制約を設けざるを得なくなった。それが良いか悪いかはともかく、「当たり前」として受け入れてしまう限り、そこに問題があっても気がつくことはできない。